

余部福三教授退任記念号の発刊に寄せて

本記念号は、2020年3月にて定年を迎えられご退職された余部福三先生の本学における長年のご尽力への感謝の気持ちを込めて企画されました。以下に余部先生のご経歴や本学におけるご活躍の一旦をご紹介します、多大なる貢献をされたことに感謝の意を申し述べさせていただきます。

余部先生は、京都大学文学部史学科をご卒業後、同大学院文学研究科において学び、研究の道を志しました。そして1987年4月に本学経営学部にて専任講師としてご着任されました。その後助教授を経て1997年に教授に昇任され、2020年3月まで本学に尽くしていただきました。33年もの長きにわたり教育・研究にご貢献くださったご功績に敬意を表し、2020年7月16日には名誉教授の称号をお送りさせていただきました。教育面では「外国史」を中心に授業を担当され、イスラーム文明の生成と発展、世界への拡大等について豊富な知見に基づきご指導くださいました。常に笑顔で温厚に学生に接しながらも、膨大な知識量で学生を圧倒する余部先生を、私は羨望の眼差しで拝見していました。

余部先生は学内行政にも大変熱心に取り組み、多様な役職・委員をご歴任されました。全学共通教育カリキュラム検討委員長（2002年から2年間）、研究委員長（2006年から2年間）、全学共通教育センター長（2010年から2年間）、入試副本部長（2010年から2年間）、21世紀教養プログラム運営委員長（2010年から2年間）、教職課程運営委員長（2014年から2年間）、全学教務委員長（2014年から2年間）。常に要職を任せられご多忙の日々にも関わらず、温厚かつ謙虚な姿勢で教職員や学生に丁寧に接していたお姿が印象的でした。

ご専門とする「イスラーム」研究にも熱心に取り組みられました（1992年には国外研究員としてもご研究を深められおります）。大変多くのご著書、論文を日本語・英語で執筆され、いずれも高い評価を得ています。以下に余部先生のご著書のみ列挙させていただきます。『イスラーム全史』（1991年勁草書房）『アラブとしてのスペイン』（1992年第三書館）『The Emergence of the Abbasid Autocracy』（1995年 京都大学出版会）『西洋の中核としての中東 上下巻』（第三書館）『Urban Autonomy in Medieval Islam: Damascus, Aleppo, Cordoba, Toledo, Valencia and Tunis』（2014年 Brill）。

私にとって、余部先生は研究者の鏡のような存在でした。常に英語の専門書を手元に置き、会議の合間などにも時間を惜しむように読書に耽っておられました。その一方で、時折通勤途中にお会いした際には歩きながらご自身の旅行談やご研究経験などを気さくにお話くださいました。学内業務で困っているときに励ましていただき適切なご指導をいただいたことが何度もあります。私同様に助けられた教職員が少なくないことでしょう。大変長きにわたり本学を支えていただいたことに深く感謝申し上げます。先生が残してくださった本学の

余部福三教授退任記念号の発刊に寄せて

「学びの文化」をしっかりと受け継ぎ、教職員学生一同邁進していきたいと存じております。
最後になりますが、余部先生の益々のご健勝とご発展を祈念いたします。

全学共通教育センター長 関 昭典